

認める言葉の力

秋田県三種町立八竜中学校

二年 毛利 美優

人に力や勇気を与える言葉。それは、なにも特別なものではなく、ごくありふれた日常的なものの中にある。

私は中学校に入学して、バレエ部に入部した。小学校の時にスポ少でバレエをしていてそれなりに楽しかったし、なによりもそのメンバート一緒に過ごすことが、私にとつてとてもかけがえのないものだったからだ。

日々の練習はとても厳しかったが、先輩たちに励まされながらそれを乗り越えていった。小学校の時よりもプレーの幅が広がり、できることが増えるにつれて、バレエが好きになっていった。

そんなある日、それまで順調だった歯車が急に狂い始めた。

「ああ、あいつ、早く辞めてくんないかな。」

友だちの一言を耳にしたのだ。確かに、私は練習中に監督に怒られることが多く、そのたびに練習を止めてしまっていた。きっとそのことをおもしろく思わない感情から出た言葉なのだろう。私は、何か言い返したかったが、ぐっとこらえた。しかし、そんな言葉が毎日続くようになった。

「あいつなしで試合しよう。」

「なんであんなのできないの。」

バレエは好きだったが、そんなチームメイトからの心ない言葉に深く傷つき、心が折れてしまった私は、バレエ部を辞めた。

そのことはすぐに他の友だちの耳に入ることとなり、根も葉もない噂話が聞こえてきた。

「あいつ、なにかやらかしたんだって。」

「バレエがうまくできないから辞めたんだろ。」

「美優が悪いんだよ。」

無責任な言葉が飛び交うクラスにいることを苦痛に感じた。

「言葉のない世界に行きたい。」

言葉に傷つき、言葉の怖さを知った私は、ほんやりと教室の窓から空を見ながら、そう思っていた。

何もやる気がおこらない日が何日か続いた。そんなある時、

「吹奏楽やらない?」

と、声をかけられた。楽器を演奏した経験など全くなく、楽譜も読めない私ができるわけがない。その誘いに、私はうなずくことができなかった。でも、

「一度体験してみてよ。」という熱心な誘いを繰り返して受け、私は音楽室に行ってみることにした。

見たことはあるが、それほど親しいわけではない人たちの中に入っていくのは、とても緊張した。そんな私に、「これ吹いてみて。」とサクソスのマウスピースを先輩が渡してきた。見よう見まねで先輩のやるとおりにそれを口につけ、思いつきり息を吹いてみた。

「あれ?」

簡単に音なんて出るものだと思っていたが、全く出すことができなかった。それがぐちゃぐちゃと、私は何回も何回も吹き続けた。

どれくらいいたったのだろう。時がたつのも分からなくなつたその時、

「パー。」

かん高い、澄んだ音が鳴った。

「できたじゃん。」

いつの間にか側に立っていた山木先生が声をかけてくれた。なぜだか分からなかったが、そのちよつとした一言が、とてもうれしかった。コツをつかんだのか、その後私は何回も音を出すことができた。そんな私に、先生は

「覚えが早いじゃん。美優だったら上手に吹けるようになるよ。」

と言ってくれた。私は、先生がずっと自分が練習していたのを見てくれたこと、そんな自分を認めてくれたことを先生の言葉から感じ、うれしい気持ちでいっぱいになった。バレエを辞めてから、これからどうしようか不安しかなかった私に、先生の一言は希望の光を与えてくれた。

「よし。吹奏楽をがんばっていこう。」

あの時の先生からの言葉を励みに、私は今もがんばっている。この夏は、県北大会で金賞となり、全県大会で演奏する経験もできた。琴丘中との合同練習をきっかけに、私の交友範囲も広がり、以前からは想像できないくらい学校生活が楽しくなった。それも、私を認め励ましてくれたあの一言のおかげだと感謝している。

私が力をもたらした言葉、それは他の人からみたら大したことのない、ごくありふれた言葉かもしれない。しかし、その人の努力やがんばり、存在を認める言葉には、人を勇気づけ力を与えるパワーがあるのだと私は思う。

言葉は、使い方によっては人を傷つけることもある怖いものであるが、逆にちよつとした一言が人を元気づけ、大きな変化をもたらすものである。だから、私は友だちに元気を与えられる、そんな良い言葉の使い手になりたいと思う。